

## ワシントンからの便り

顧問 稲賀繁美 (国際日本文化研究センター)

皆様ご無沙汰しております。二〇〇六年の秋より一年間の予定で、北米合州国の首都、ワシントンに来ております。このため、昨年度のOB稽古では皆さんと汗を流すことができませんでした。当地では、議会図書館で研究をする、という自由な身分を満喫しております。自宅は、地下鉄で郊外にむけて三十分たらずの、クリーヴランド公園駅。窓の前に谷間が見える森のなかで、深夜には狐が窓のしたを散歩していたり、お互いに鳴き交したりする、都会とは思えぬ自然環境です。すぐ近くには国立動物園があり、パンダの親子が人気を集めていて、週末ともなると多数の人間の親子連れがやってきます。

さて、この動物園の最寄の地下鉄駅をあがったところに、ワシントン到着早々、合気道の道場を見つけました。指導するのは、マイケル・ベルトリさん。海兵隊に属していた方で、ハワイや沖縄で長年の稽古を積まれた実力者です。ワシントンの道場も、沖縄の山口巖師範が主催される沖縄合気会に属しており、数年前にも山口師範じきじきのご指導を得たほか、本年秋にも、再度山口師範をお招きする予定と伺いました。ベルトリさんは本部道場で四段を認可されています。道場は、以前は、近くの地下駐車場跡の一角を借りた、仮道場だったものを、数年前、現在のコネチカット・アヴェニューの目抜き街に引っ越してきたものです。去年は道場生たちと数週間におよぶ日本遠征を果たしたそうですが、夏の東京はもとより、沖縄の酷暑には、アメリカの皆さんは驚嘆したとのことでした。ベルトリ先生は、数年前までは会社の外交の傍ら、夕刻から道場で稽古を指導していたそうですが、日本遠征を期に、道場一本で生活を立てる決意をされ、現在では稽古はもちろんとして、道場の管理、受講者の世話、会計処理、それに受講希望者への案内や渉外などを含めて、一手を取り仕切っておられます。生活の様子を拝見すると、まさに住坐臥全て合気道が中心という、稽古三昧の境地とお見受けしました。

古参の生徒には有段者も五名ほどおられ、当方が道場に通り始めると、技などに違う部分もあるためか、興味をもたれ、稽古を付けてくれるようにとせがまれます。国籍はきわめて多様で、お名前はここには記しませんが、イタリア出身の電気工の愉快な大男、フランス出身の技のうまい男性、メキシコ出身の真面目な青年、ロシア出身の生物学の研究者、それにアメリカの黒人で、以前は空手を実践していたものの、年なので合気道に転向したという、もうお孫さんのいる世話好きなおじさん、などすっかり仲良しの仲間となりました。ここにさらに女性たちで古参の稽古熱心な人たちがいて、道場はそこの病院よりも清潔、と自画自賛するほどの状態に掃き清めて、稽古に打ち込んでいます。なかには週日毎晩参加する人もあるそうですが、当方は時間の都合で、土曜日の午前中に出席するのみ。三時間の稽古のうち、最後の一時間は黒帯組の鍛錬の日、武器を用いた稽古の日などに分けられており、小生も一月から、この時間の指導をベルトリさんから依頼され、突きの稽古や、剣術、杖術の基礎などを、皆さんに教えているところです。元柔道選手のポーランド出身者など、体格や腕力ではまったく当方など敵わない猛者が何人も居ますが、皆いたってすなおで研究熱心なひとばかり。非力な当方のほうが持久力や技、あるいは間合いの取り方や攻めの氣勢で、大男たちを圧倒するところのあるのを見ると、実にすなおにその秘訣を吸収しようと教えを乞いに来てくれます。

そうした稽古を通じて、あらたに認識したことも、多くあります。ひとつには、姿勢や受けのとり方の稽古には、完成はない、ということでしょうか。とりわけ初心者とお手合わせをすると、若い頃ならば体力任せで乱暴な技をかけてごまかしていた部分が、あらためて分かってきます。右での体捌きと左での体裁きに違いがあって、自分の体の振れに気付くこともあります。また剣術などでは、剣の握りが左右対称ではありませんから、左では出来る技が右では有効でないことなどに気付く体験も大切です。腰を十分に落とした姿勢で、自由自在に動ける足捌きの大切さも、とりわけ初心者への指導のなかで腑に落ちるところでした。それとも関連しますが、ふたつめには、自分の癖を知ることの大切さでしょうか。得意な身のこなしを開発することも大切ですが、不得手な捌きを克服する努力も大切でしょう。とりわけ受身などは、年齢とともに無理が利かなくなるため、却って加齢とともに、若いころの受けの雑な部分が見えてきます。同じ場所で繰り返して受けを取ることができるか。受身から立ち上がる動作に、無駄な動きはないか。相手との間合いは、眼を瞑っていても把握できるか。など、自らに新たな課題を課すと、現在の自分の未熟さが見えてくるとともに、技の奥深さも自覚されてきます。

さらに、自分より圧倒的に腕力や体重、体力のある相手をいかに捌くかの訓練は、実際にそうした相手とお手合わせしないかぎり、なかなか実感を掴むことはできません。北方系の白人の腕力や上腕のリーチは、体験しなければ把握は困難でしょう。黒人のひとたちの跳躍力や敏捷性は、アジア人種とは異質ですが、逆にアジア人種の持久力はこうした人たちと一緒に稽古をしてみて、はじめて納得される場所でもあるでしょう。どちらが優れているかという比較ではなく、彼を知り己を知る経験が大切なのだと思います。そうした知識が、指導の際により行き届いた配慮を示す余裕となり、指導そのものにも深み、厚みを与えてくれる教訓となるはずです。さらに自分よりはるかに軽量の人、男性ならば女性との稽古からは、力で無理やりかけている技の粗雑さが見えてきます。子供と稽古をすると、インチキは通用しません。子供を納得させる技が見せられるかどうか、これは大学で四年程度、若者通しで稽古をただけでは、まだ容易には会得できないところでしょう。合気道の深さ、多様さは加齢とともに、さらに見えてきます。

こんな風を書くに、皆クソ真面目に稽古ばかりしているように見えるかもしれませんが。でも道場を出ればお互いに冗談を言い合う気さくな仲間であり、異なる文化的な背景を控えた人たちが集う道場は、人間模様を観察して人生を味わうにも、きわめておもしろい環境です。年末にはクリスマスの宴会、大晦日から新年には越年稽古など、多彩な催しもおりこまれました。また昇級昇段試験では、山口先生のビデオを徹底的に研究して会得したものとおぼしい、ヴェルトリさんの見事な杖術を拝見する機会もありました。とりわけ、この道場でよかったと思うのは、ひとつにはヴェルトリさんの模範演技。昇段昇級の最後には、道場主が受験者ひとりひとりを相手にぶっとうして稽古をつけます。二十分に及ぶ模範演技では、まだ七級、六級程度の初心者が、打ち合わせもないのに見事な受けを取る様子に感嘆しました。さらに上級者との立会いでは、長時間にわたるやりとりで呼吸を乱さぬ、安定した無駄のない身のこなしが不可欠です。息のあがったほうが負けとなるわけで、力任せの技では、結局最後は体力消耗で、自ら墓穴を掘ってしまいます。むろん若いころは力任せの稽古も大切です。そこで年長者に全力で向かって行きながら、あつけなく返される経験を積んでこそ、次の境地が見えてくるはずで

もうひとつ、この道場で教わったことは、稽古の最後の礼でした。全員で正面に礼をするだけではなく、それに続いて、ペアで稽古をした相手に、ひとりずつ互いに視線を合わせ、礼を交して絆を確かめることが、この道場では励行されていました。お互いの信頼と感謝があつてはじめて、お互いに切磋琢磨できる。そのことが稽古の最後に具体的に確認されるわけです。できればこうした優れた習慣は、日本での稽古にも取り入れたいものだ、と感じました。三重大学の稽古の最後にも、導入してみても如何でしょう。

最後にひとつ。三重大学の皆さんも、できれば外国での経験を若いうちにもっていただければ、と思います。或る程度長期の海外滞在となる場合には、ぜひとも海外の道場に顔を出してご覧になることをお勧めします。日本の流儀が通用せずにご迷惑する折もあるでしょう。また自信のあつたはずの技が簡単に跳ね返されて、焦ってしまったり、一時的には自信を失ってしまったりという経験もあるかもしれません。しかしそうした蹉跌を乗り越えたときには、自分がひとまわり大きく成長していることに気付くはずで、合気道をともに稽古する仲間たちは、皆さんの好敵手であるとともに、困難にある皆さんを力づけ、助けてくれる貴重な友人でもあるはずです。かれらとの交友は、皆さんの人生におけるかけがえのない糧であり、その交友圏が、皆さんの人生に広がり潤いを約束してくれるものと信じます。外国で得た友情は、翻って皆さんが、遠来の友人を日本で迎えるときに、お返しすべき借りともなるでしょう。その貸し借りから豊かな人生が織り成されてゆくならば、皆さんが三重大学で合気道を嗜んだことの意義も、さらに増幅されることと信じます。

ワシントンにて二〇〇七年三月二一日